

連続ワークショップ「性なる仏教」第3回 浄土真宗で語られる女性

開催日時:2022年11月12日(土)13:00-16:00

会場:龍谷大学大宮学舎東コウ 1F アクティビティホール

(及び zoom ウェビナーによるハイブリッド開催)

参加者人数:約 40 人

■研究発表

発表1「真宗史における女性」

岩田 真美(龍谷大学)

発表2「浄土真宗における母親像」

小野嶋 祥雄(龍谷大学)

■座談会

◆司会:大谷 由香(龍谷大学)

【報告の概要】

仏教は互いの違いを認め合い、多様性豊かな世界を目指すことを説くにも関わらず、仏教を含めた現代の宗教界におけるジェンダー平等が進んでいるとは未だ言い難い。例えば、日本伝統仏教の主要10宗派の宗義会議員のうち、女性議員の割合はわずか2%である。世界的にジェンダー平等が促進される中、なぜ日本のジェンダーギャップ解消は進展しないのか。引き続き課題解決のヒントを探る第3回ワークショップでは、浄土真宗における女性の語られ方に焦点を当てて、議論が展開された。各発表の概要は以下の通りである。

岩田氏は、浄土真宗の歴史的展開のなかで周縁的に語られてきた女性像を取り上げた。親鸞の著作では、変成男子説による女人往生を説くものと、性差による区別なく直ちに救済を説くものの二種類が存在する。ただし、親鸞の著作において、女性についての言及は経論からの引用である場合が多く、彼自身が女性の救済を論じたものは極めて少ない。しかし、河合隼雄から、親鸞は明恵と並んで、女性問題を正面から論じた僧侶の一人であり、その解決過程において夢が重要な役割を担っていたことが指摘されている。親鸞の六角堂での夢告は、『恵信尼消息』が発見されたことで注目されるようになるが、その詳細は明らかとなっていない。夢告を巡る解釈には、『上宮太子御記』に引用される「廟窟偈」の説と、『親鸞夢記』などにみられる「行者宿報偈」とする説がある。前者は、『恵信尼消息』の発見者である鷲尾教導に提唱されたものであり、後者の代表的な論者に赤松俊秀が挙げられる。親鸞伝である『親鸞聖人御因縁』では、「行者宿報偈」が親鸞の妻帯と結び付けられている。また、親鸞以後の議論として、存覚の『女人往生聞書』や蓮如の『御文章』では、女人往生論が積極的に説かれている。吉田一彦は、仏教における女人救済の構造を「差別なのか、救済なのか」という排他的二元理解で論じるべきではなく、「差別と救済とが一体となった思想」と主張する。実際に蓮如の時代には教団の教線拡大によって、女性の信者が急速に増大したことが確認されている。

最後に氏は、近代真宗における女性教化について本願寺派を中心に触れた。1882年、善永寺において「女人教会」が結成されて以降、仏教の婦人信徒を主体とした組織は、日本各地において拡大した。真宗教団における婦人会の全国的な組織化は、日露戦争を機に活発になっており、

「女性教化」は近代的総力戦とも密接な関係にある。この動向は、女性に国民としての自覚を啓発し、良妻賢母主義的な女性像が強調されるとともに、戦時下では「銃後の守」に備える自覚を促したことを意味する。1908年には、本願寺派は女性教誨師の要請に着手し、翌年に在家信者や女性を教化者として登用する道を開いた。そして1931年、本願寺派では第1回女性僧侶の得度式が行われ、23名の女性僧侶が初めて誕生した。

まとめとして、男性僧侶による教説や「語られた」女性像が中心となっており、女性自身が主体的に語ったものは極めて少ないことが指摘される。仏教において女性は往々にして「教化される」(被救済者)側に位置づけられるが、近代の真宗教団において「教化する」女性(女性教化者)が誕生したことは注目に値する。しかし、その背景には近代的総力戦があり、その関係性を解明していくことも今後の課題である。ジェンダーの視点を取り入れながら、男性中心に描かれてきた仏教史を相対化させ、新たに捉え直していく作業も必要であると、氏は結論づけた。



岩田 真美氏

小野嶋氏は、現代における浄土真宗の母親像を取り上げた。例えば、『本願寺新報』では、しばしば母親の子どもに対する愛情が阿弥陀如来の救いに喩えられるが、直近3か年において女性による本紙の執筆数は皆無である。この状況をどのように理解すれば良いのか、検討を行った。この譬喩の背景について、氏は、まず教義的背景から迫った。『浄土和讃』では、「子が母を慕うように、命あるものが阿弥陀仏を心から信じると、この世でも次の世でも、間違いなく仏を見ることができる」、「釈尊と阿弥陀仏は慈悲深い父母である。巧みな手だてをさまざまに施し、わたしたちにこの上ない真実の信心をおこさせてくださった」と記されており、教義において阿弥陀如来の救いが母親の愛情に喩えていることを確認した。また、浄土真宗において法話は、阿弥陀如来の救いの法を讃嘆する「仏徳讃歎」と位置づけられていることから、法話のあり方の重要性も指摘した。以上を通して、阿弥陀如来の救いを母親の愛情に喩えて語ることは、近年に始まったことではなく、長い歴史が存在していることを指摘した。

ただし、この譬喩に対する批判的見解も存在する。例えば、松原致遠は、婆婆の母の慈悲は、人間性によるものであり、阿弥陀如来の慈悲に喩えることに批判的姿勢を示す。また、松原は、自己都合による解釈ではなく、母の慈悲を本当に理解することの可能性についても懐疑的である。他方、遠藤了義は、譬喩とは相異なるもの同士の一部が類似しているが故に、譬喩たり得ることを指摘した。つまり、子どもに対する愛情は母親が持つ性質の一部であり、母親には「母であることの苦しみ」

など様々な要素が存在する。浄土真宗における母親の語りは、母親の愛情を阿弥陀如来の救いに喩えてよく語られるが、そうした語りには「母であることの苦しみ」など、母親の子どもに対する愛情以外の要素を捨象してしまう可能性がある。

最後に、今後の課題として、他宗の法話やアメリカなどの海外における浄土真宗の法話では、子どもに対する母親の愛情を譬喩として用いるのかという疑問や、法話は「不戦平和」などをトピックとして想定するが、従来の語り口に加えて新たな語り口が要請されるような事柄との比較検討の必要性を挙げた。



小野嶋 祥雄氏

後半の座談会では、まず登壇者が互いの発表に対してコメントし、後に参加者による質問やコメントを取り上げつつ、登壇者間において活発な議論が展開された。まず岩田氏から、男性中心の布教の場においてもジェンダー差別は存在するので、ジェンダー意識を持ち合わせているか否かの差は大きいことを改めて感じたとコメントがあった。小野嶋氏は、知人の女性の体験談から、日々の生活の中で意識・無意識的なジェンダー差別があることを紹介した。司会の太谷由香氏(龍谷大学)は、男性が中心となる環境では、なかなか女性たちのジェンダー差別の経験を表に出すこと自体が難しい、と発言した。フロアからは、「仏教の女人罪業観が布教の有力ツールとされ、一意の人に効果的に浸透したことが社会レベルでの女性差別を強化し、決定的なものにしたという側面はないか」「なぜ近代における婦人雑誌の先駆けとして本願寺派が関わっていくのか、戦争も原因していると思うが、いち早く本願寺派が動けた理由には本願寺派の人々が抱いていた関心が影響していたりするのか」「阿弥陀仏の救いを母の愛情に喩えることについて、教義的側面もあるかと思うが、近代におけるジェンダーギャップが反映されてもいたのではないか」など多数の質問が寄せられた。



左から岩田 真美氏、太谷 由香氏、小野嶋 祥雄氏